

## 発表テーマ 『今後の大学の役割』

## 1. はじめに

C 班 1 グループでは発表テーマを『今後の大学の役割』と設定し、『大学の役割』の現状を考察するとともに、社会からの要請とそれに応えるための手法、またその課題と解決方法を提案した。

## 2. 大学の役割

まず、大学の役割として、「教育」「研究」「社会貢献」の 3 つの柱が挙げられた。これら 3 点については、大学を構成する主要 3 アクター（学生、教員、職員）の各役割を考える上で導き出された。これらの役割については過去、現在、あるいは将来的にも変わらず大学に期待される役割と考えられる。

## 主要 3 アクター

学生：知識の吸収（インプット）・発展、発表（アウトプット） →教育面

教員：自らの専門分野の研究・発展 →研究面

講義内容の充実 →教育面

専門分野での社会貢献 →社会貢献面

職員：教員・学生へのサポート →教育面・社会貢献面

## 3. 大学の現状

しかし現状では、下記に挙げるように社会にさまざまな変化が生じてきている。

- ・少子高齢化（18 歳人口の減少）
- ・グローバル化
- ・情報化
- ・経済停滞 など

これらの変化により、社会（特に企業）から大学で養成が求められる内容が拡大し、学生は新たに「考動力」「学士力」「即戦力として必要な能力（資格）」などを求められるようになった。

そこで、このような能力を持った学生を養成するために、大学ではさまざまな試みを行うようになった。ここでは表 1 のように 4 つの例を挙げ、それぞれのメリット・デメリットについて考察を行った。

<p style="text-align: center;"><b>LC（ラーニングコモンズ）の設置</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○学習サポート</li> <li>○コミュニケーションの能力の向上</li> <li>×使用促進の取り組み（どう運用するか）</li> <li>×コスト/場所→費用対効果：需要はあるのか</li> </ul>	<p style="text-align: center;"><b>キャリア教育の充実</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○社会に出た時のギャップ解消</li> <li>○広報物として扱いやすい（求人・入学者募集に効果的）</li> <li>×担当教員の専門性（専門人員獲得のコスト）</li> <li>×量産型就活生</li> </ul>
<p style="text-align: center;"><b>アクティブラーニングの促進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○能動的な学習（アウトプット力向上）</li> <li>○学習時間が増える（事前準備・事後）</li> <li>×大規模クラスの運営方法</li> <li>×導入について教員への周知が必要</li> </ul>	<p style="text-align: center;"><b>ICTの充実（ポータルサイト、ポートフォリオ）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○利便性（情報の集約・発信）</li> <li>×リスクマネジメント</li> <li>×導入コスト</li> <li>×ユーザーの多様性への対応（教員への使い方説明、教員による継続運用）</li> </ul>

表 1. 大学が行うようになった試みの例とそれぞれのメリット・デメリット

※○で挙げた点がメリット、×で挙げた点がデメリットと考えられる

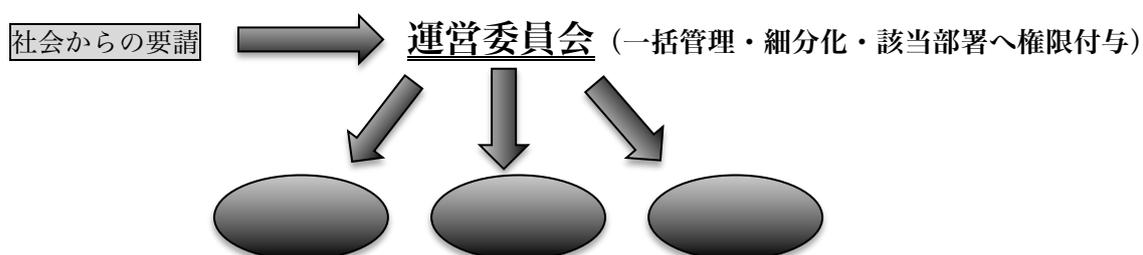
#### 4. 問題点の深堀

上表の通り、各々の施策についてメリットはあるが、反面デメリットも伴う。たとえば、アクターの一つである教員への負担が発生する。LC 等教育に注力すると研究が疎かになる可能性があるし、アクティブラーニングを導入した場合は新たな授業運営方法を模索しなくてはならない。また職員にとっても、促進の取り組みに尽力することが日常業務に影響することが考えられる。

これらの負担増により、先述の大学の役割が損なわれる、維持できなくなる可能性が生じる。

#### 5. 解決策の検討

大学の本来の役割を損なわずに、各施策を実施するための手段として、C 班 1 グループでは専門の「**運営委員会**」の設置を提案する。下図のように、社会からの要請を一元的に管理・運用し、トップダウン式に該当部署に権限を付与する。このように各業務を細分化して振り分けることで、業務内容がスリム化され、大学運営がしやすくなるとともに、各アクターの負担が減り、大学の役割を損なわずに各施策を進められるようになることが期待される。



#### 補足. 解決策の例

表 1 に挙げた 4 例のデメリットについて、それぞれの解決策を検討した。

##### ●LC (ラーニングコモンズ) の設置

×使用促進の取り組み (どう運用するか)

必修の授業に取り込む (1 年次教育・講義の中で)。

LC の使い方を指導する (シラバスに明記し、促進させる)。

##### ●アクティブラーニングの促進

・教員への周知

学内で研修会 (対教員) を開く (FD)。

授業評価アンケートで実情を把握する (評価が低い教員に対し、教務委員会等から指導する)。

##### ●キャリア教育の充実

・担当教員の専門性

キャリアカウンセラーを外部委託し、専門性の向上を図る。

・専門科目取得数減少

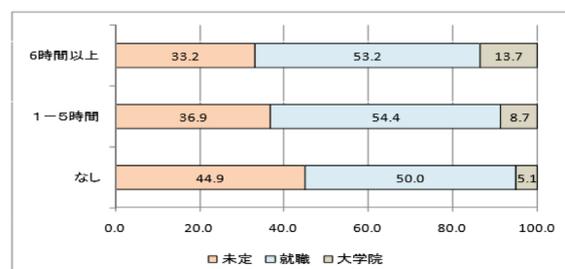
一般教養・自由選択科目として、カリキュラムに盛り込む (外部講師を呼び、魅力ある科目としてアピールする)。

・量産型就活生

1～3 年次の学習時間の少なさが量産型を生んでいるため (右上図参照)、教学面の充実を図る。

#### 大学での学習時間は就職にも響く

▶ 大学1年生のときの勉強時間(授業出席時間を除くと)、4年生12月での就職決定状況 N=578



▶ 18 出所: 東京大学 大学経営政策研究センター「高校生追跡調査」から算出

##### ●ICT の充実

・リスクマネジメント

「全学的な対応」が必要 (知識・操作方法)。

システムダウンの危険性には、予備のサーバー設置などで対応。

個人情報保護のため、閲覧権限や期間の制限などを行う。

・ユーザーの多様性への対応

学生相談室、学習支援 (LC) の担当者、事務職員で対応。入学時のオリエンテーション、日々の窓口対応。教職員への研修 (オンラインマニュアルの作成)。